

ぼくの
ゆかいな
応援団



「ただいまー。」

玄関をあけると、家にはだれもいなかった。

よかったと少しだけ思った。

いつもだったらランドセルをおいて、すぐに遊びに行っちゃっけぞ

今日はそんなきぶんじゃない。

だって、今年初めての算数のテスト、ぜったい百点だと思ったのに……。

こたつの上に、テストをおいてながめてみた。

見れば見るほど、くやしい気持ちかわいてきて、

ムクムクと胸いっぱいにひろがる。

「もう、サイテー。」

とつぶやいて、こたつの中にもぐり込んだ。

チッチッチチ。

しずかな部屋に、時計の針の音だけひびいている。

かべにかけてある時計の音だ。

いつもは、そんなに気にならないのに……と思いがち、

部屋の中をぐるっとながめた。

かべには、おじいちゃんの賞状、今年のカレンダー。

テレビの横には、犬の置物、貯金箱、ペン立て。

じっくり見るってなんてそうないけど、けっついろいろなものがある。

あのそうじ道具みたいな物はなんだっけ？

そうだ、くま手だ。今年の初もうでの時に買った。

七福神が宝船にのかった、はでなかざりがついている。

今年は、これで福をかき集めるぞって、父さん言ってた。

神様が七人で七福神か……。

一人、二人、三人、四人、五人、六人。



エーッ？六人じゃん。

こたつからガバツとはい出し、今度は指さし確認。
やっぱり一人足りない。



「出かけたみたいよ。」

えっ、だれっ？家にいるのはぼく一人のはずなのに、どこからか声がした。
後ろをおそるおそる見た。

だれもない。

「つー、つー、くま手。わたし、弁ざい天よ。

こんにちは♡。えびすさんは、外出中よ。」

心ぞうがドクンと動いてしりもちをついた。

弁ざい天だったっ？



あわててくま手を見た。

ギターのような楽器をかかえた、かみの毛の長いお姉さんがウィンクしてる。

その後ろの、よろいをつけ、ほこを持ったこわそうな神様がこっちを見た。

鋭い目がキラリと光る。もしかして、この人びしゃ門天？

「おい、ぼうず。テストのせいかな？元気がないな。

外で遊んで来い。そうすりゃ元気が出るさ。」

「だめだめ。復習が大切よ。さあ、勉強はじめましょ。」



びしゃ門天は外で遊べっていうし、弁ざい天は勉強をすすめる。

一体どうなってんの？

頭をかかえるぼくには、おかまいなしで

「横から口をはさむなよ。」

「何ですって〜？」

二人は、くま手の上でぐらみ合ってる。



「まあまあ、お二人さん。おはなし、聞きましょっか？」

ぽってりお腹のほてい様が、やさしく二人をなだめ始めた。

これは夢？暗い気持ちでごろじゃない。ぼくの目がグルグル回り始めた。
大きな袋をかついだ大黒様がささやいた。

「困った時は、長老の意見を聞くのが一番だ。」

じゅ老人と福ろうくじゅ、二人のおじいちゃん

神様は口をそろえて言った。

「笑うのが一番じゃよ。笑う門には福来たる。」

みんなで笑おう。ワッハッハ、アッハッハー！」

六人の神様が顔を見合わせ、大きく口を開けて笑い出した。

ぼくもなんだか楽しくなって笑い出した。

神様の顔もぼくの顔も、まるで福笑いのようになっていた。

大きな声で笑ったら、ぼくの胸の中いっぱい広がったサイテーの気持ちは

消えてなくなった。



「ただいま。何か楽しい事でもあったの？外まで笑い声が聞こえてきたわよ。」

「あのね、母さん。七福神が笑ってたんだ。」

母さんの手を引っぱって、くま手を見せようとした。

「なに、おかしいな」と言ってるの？ハイハイわかりましたよ。それよりね、聞い

てよ。今晚のおかずは、鯛のおさしみよ。すごいでしょ。」

はな歌まじりの母さんの肩ごしに、つりざおを持ったえびす様が、

ひょっこり顔を出した。

そして、こちらに向かってVサインした。

みんな、はげましてくれてありがとう。

ぼく、次はきつとがんばるからね。



おしまい

